

メシア誕生に賭けた信仰

マタイ2章1～12節

2021年12月19日

松田 基子 師

クリスマスおめでとうございます。今日はキリスト者にとって、最も喜びとするクリスマスです。神の御子イエス・キリストが、神様の愛を私達人間に与えるために、人の子となって生まれて下さった事を喜び祝う日です。そのイエス様は、ユダヤ人としてお生まれになりました。でも、イエス様は、ユダヤ人だけのために、お生まれになったのではありません。しかし、ユダヤ人達は、自分達は神様に選ばれた民だという、選民意識が非常に強く、
『神様の祝福は、自分達だけにある』
と、宗教的傲慢に陥っていました。

神様は確かに、ユダヤ人をお選びになりましたが、それは神の御子を、この世に誕生させる為にお選びになったのです。それなのに、ユダヤ人達は、

『神様の啓示は、自分達だけに知らされている。』
と思いついていました。勿論、神様はそのような小さな、狭いお考えは持つてはられません。詩編の19篇には、

「天は神の栄光を物語り、大空は御手の業を示す。昼は昼に語り伝え、夜は夜に知識を送る。話すことも、語ることもなく、声は聞こえなくても、その響きは全地に、その言葉は世界の果てに向かう。」
と歌われています。

神様は天地万物を創造され、ご自身が創造主であり、全被造物を守り導いておられる事を、森羅万象を通して発信しておられます。

詩編19篇の、7節には、太陽について、
「天の果てを出で立ち、天の果てを目指して行く。その熱から隠れうるものはない。」
とあります。これは詩的な表現であって、科学的な事ではありませんが、言わんとする所は、
『地球全体は、太陽の光の当たらない

ところは無いように、神様の栄光は全地に現されている』
と言うことを歌っています。

神様はご自身が、全地の造り主であり、支配者であり、歴史を導かれるお方である事を、ユダヤ人だけでなく、全地に発信し続けて来られました。今朝の聖書箇所である、マタイ福音書2章には、ユダヤから遠く離れた東方の地に、そのような神様の啓示に気づいて、神様の導きに従った人達の事が記されています。

マタイ2章1節に、
「イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。
そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、」

とあります。イエス様は人類の歴史の直中に、ユダヤ人として、お生まれになりました。それはヘロデ王の時代でした。このヘロデは、ヘロデ大王と呼ばれた人物で、ローマの元老院から、ユダヤの王の称号を、紀元前37年に与えられて、紀元前4年に、病で亡くなるまで、ローマの傀儡(かいらい)政権として、ユダヤを治めた王です。

ローマの権力を後ろ盾に、権勢を誇りました。狡猾な政治手腕を以て、様々な税収を得て、ユダヤのヘレニズム化を図りました。彼の願いはローマ風の都市を築く事でした。城塞、貯水池、水道橋、競技場、劇場、立派な宮殿等を建設しました。それに、カイサリアを一大港湾都市に整備し、エルサレム神殿を壮麗な大神殿に、大改築しました。この様に彼は、別名建築魔と呼ばれる程、様々な物を建設し、自分の偉業としました。一方、民衆は重税に喘ぎ、その宗教的なプライドは、ローマ化を望みませんでしたから、ヘロデ王に反感を抱きました。

イエス様がお生まれになったのは、そのヘロデ王の晩年とされています。ヘロデ王の晩年は、悲惨でした。彼は次々に10人の妻と結婚して、15人の子女を設けました。老年になったヘロデは、体力気力が衰える一方、猜疑心の塊

になりました。多くの妻とその子供達は、結果的にヘロデの王位を狙う事になりました。互いに誹謗中傷が増し、それによって、ヘロデは猜疑心の塊となり、1人の妻と、3人の息子を殺害させてしまいました。病に苦しみ、紀元前4年に、亡くなったのですが、その年代から、イエス様の誕生は、紀元前7年から紀元前4年までの間と推定されています。

ヘロデ大王には、最早、王としての威信はなく、ただ、王位の保身に執着していました。そこへ何と、東方から占星術の学者達が、エルサレムの都にやって来て、

「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」

と言ったのです。ユダヤ地方の人々が東方と言えば、それは、ユーフラテス川の彼方、メソポタミヤ地方です。かつて自分達の先祖が、バビロン捕囚として連れて行かれた地方です。

かの地では、占星術が発展しました。広大な砂漠、夜空に輝く星は、どんなに美しいことでしょう。そのように美しい世界を造られた神様を讃えずにはいられなかったことでしょう。しかし、夜空は、そのような日ばかりではありません。嵐の日も、天変地異も起こります。広大な砂漠を初め、星空を十分に観察できる所では、占星術が学問として発展しました。天変地異が起こった時の、星空の位置や、気象観測と星の関係を、事細かに記録にとり、統計をとる、その統計に基づいて、農業に役立て、あるいは、こう言う星の配置になると、飢饉が起こるだろう。洪水になるのだろうとの、予測を立てたのだそうです。それを、自然現象に限らず、あらゆることに当てはめて行ったのだそうです。ですから、占星術というのは、当てずっぽうで言うのではないのだそうです。当時は一つの学問として、研究され、学者と呼ばれてもおかしくない研究者的存在がいたのです。

そのような彼らが、千キロを超えるであろう旅

であり、様々な困難、危険が予測されるにも拘わらず、それを承知で何故、エルサレムにまでやって来たのでしょうか。天地万物を創造された神様は、ご自身が、世界の創造主であることを、全ての人に、星空を見せながら、また、大自然を見せながら、語り掛けておられました。

また、天地万物を創造された偉大な神様がおられることは、ユダヤから、バビロンに捕囚として連れて行かれた人々が、その地の人々に、語ったであろうと、言われています。彼らは当然、**ユダヤ人の王として、世界の救い主、メシアが現れることを語ったに違いありません。そのメシアが神様の真の御心を現されると言うことが、**伝えられたことでしょう。マタイ2章に記されている占星術の学者達は、その事を知っていた人達だったでしょう。彼らの心には、真理を求めて止まない、**真理への渴望**がありました。

真理とは、何でしょう。それは私たち人間が、全生命を賭け、全存在を賭けて、信頼するものです。イエス様は、ヨハネ福音書14章6節で、

「わたしは道であり、真理であり、命である。」と言われました。つまり、キリスト教に於いて、真理はイエス様、ご自身なのです。東方の占星術の学者達は、捕囚民によって伝えられた、ヤハウエ信仰を知り、民数記24章17節の、メシア預言をした異邦の預言者、バラムの言葉である、

「わたしには彼が見える。しかし、今はいない。彼を仰いでいる。しかし、間近にはない。ひとつの星がヤコブから進み出る。」という、この言葉を知って、待ち望んでいたかも知れません。占星術の学者達は、エルサレムの人に、

「わたしたちは、東方でその方の星を見た。」と言っています。彼らは神様が造られた星空に人生を賭けてきたのです。彼らは天地万物を造られた神様が、

『ご自身の御心を行われるメシアを、約束の通り、ユダヤ人の王として誕生させられた。』

その事を、

『自分達に特別な星を輝かせて、教えて下

さった。』
と信じたのです。

彼らは、
『そのお方を礼拝することで、
真の神様に繋がるができる。』
と確信しました。 そうでなければ、命の危険を
犯してまで、遠い遠いユダヤまで、来る事はしな
かったでしょう。 東方の占星術の学者達の到
来は、直ぐに都中に広がり、王宮のヘロデ王の
耳にも入りました。 3節を見ますと、

「これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。」
とあります。 ヘロデ王も民衆のメシア待望を、よ
くよく知っていました。

『メシアが現れたのだろうか。
わたしはどうなるのだろうか。』
『王位を奪おうとする者を生かしておく、
訳にはいかない。』
エルサレムの人達にとっても、このニュースは
ヘロデとは別の意味で不安でした。

エルサレムの都に、戦いが起こっては大変で
す。 ヘロデ王は早速、聖書に精通している祭
司長達や、律法学者達を皆集めて、メシアはど
こに生まれる事になっているのかを、問い正しま
した。 祭司長、律法学者達は、その事につい
て専門家らしく、5節で、

「彼らは言った。 ユダヤのベツレヘムです。
預言者がこう書いています。

『ユダの地、ベツレヘムよ、おまえは
ユダの指導者たちの中で、決して一番
小さいものではない。 お前から指導者
が現れ、わたしの民イスラエルの牧者と
なるからである。』

と答えました。 彼らは常に聖書を学んでいま
したから、即答することが出来ました。 しかし、信
じてはいませんでした。 なぜなら彼らは預言の
言葉に従って、立ち上がって行くことはしません
でした。 ベツレヘムは、エルサレムから、南10
キロに位置する小さな村ですが、そこは、ダビデ
王が生まれ育った地でした。

メシアは、

『ダビデの子孫から現れる』

との約束ですから、ダビデの町ベツレヘムに、
メシアは出現するに違いないのです。 預言者
ミカが、そのように預言していました。 ヘロデは
その事を知ると、占星術の学者達を密かに呼び
寄せました。 密かに、と言う言葉に、ヘロデの
心の状態が見えてきます。 彼は、自分の王位
を守る為なら、わが子さえ殺害させるのです。
自分を不安にする存在は、全て抹殺せずには
おれません。 その心を隠して、ヘロデは占星
術の学者たちに、彼らが東方を出発する前の、
その星が現れた時期、即ち、メシアが誕生した
時期を、詳しく聞いたのでした。 ヘロデは自分
の殺意を隠して、学者たちに、8節で、

『行って、その子のことを詳しく調べ、
見つかったら知らせてくれ。 わたしも
行って拝もう。』
と言ってベツレヘムへ送り出した。」
のでした。

するとどうでしょう、9節を見ますと、

「彼らが王の言葉を聞いて出かけると、
東方で見た星が先立って進み、ついに
幼子のいる場所の上に止まった」

のでした。 東方で見た星、それがこの時、表れ
たということは、学者達が、世界の救い主、メシ
アが生まれたと信じて、自分達の全存在を賭け
て、東方を出発してから、この時まで、その星は
現れる事はなかったと言う事です。 信じて賭け
て、実際に歩いて来た時に、その星は再び現れ
ました。 そして、彼らは見る事ができました。

信仰の真理、真実と言うのは、神様の約束に
向かって、信じて歩み抜いて、はじめて証明さ
れるものであり、神様の真実を受け取ることが出
来るのです。 信じて、賭けて、歩み出さなけれ
ば、決してそれを得ることは出来ません。

ヘブライ人への手紙11章1節に、

「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、
見えない事実を確認することです。」

と、ある通りで、信じて、踏みだし、歩み通して得
る、そこに、信仰の真理があります。

占星術の学者達の喜びは、信じて、賭けて、

歩んで来た者の喜びでした。10節の、
「学者たちはその星を見て、
喜びにあふれた。」
と言うのは、これこそ神様の真実を知った信仰の喜びでした。

「家に入ってみると、幼子は母マリアと共に
おられた。彼らはひれ伏して幼子を
拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を
贈り物として献げた。」
とあります。

イエス様がおられた家は、立派な家ではな
かった筈です。学者達は、もうそのようなこの
世的な事に、躓くことはありませんでした。

『彼らは東方からベツレヘムまで導いて
下さった神様の御手を信じて、
この赤ちゃんが、神様の御心を世に行わ
れる救い主、メシアであることを確信して、
平伏し、拝んだのでした。』

幼子イエス様の前には、彼らの宝が
ささげられました。

黄金は、王様の権威を現すものです。
乳香は、祭司が神様にささげる物です。
没薬は、死者の葬りに使います。

イエス様は、真の王、真の神であられるのに、人
類の罪を一身に負って、十字架に死んで人類
の罪を贖って下さるのです。これらの献げ物は、
真にイエス様が、**人類の救い主、メシア**であるこ
とを証すると共に、イエス様に**相応しい献げ物**で
した。

学者達は、赤子のイエス様を礼拝し、献げ物
をささげた事によって、このお方を信じ、自分の
全存在を、このお方に賭けて生きて行くと言う事
を表明したのです。それはつまり、このお方を
お遣わしになった。天地万物をお造りになった、
神様を信じて生きる事でもありました。その神
様はユダヤ人だけの神様ではなく、全世界の神
様であり、メシアを通して、御心を行われるお方
なのです。

彼らは、12節で、

「ヘロデのところへ帰るな」

と、夢でお告げがあったので、別の道を通って、
自分達の国へ帰って行きました。彼らはそこで、
新しい生き方、創造主である神様、そして、メシ
アを信じて生きたのでした。

クリスマスは、私達の罪を贖い、天の御国へ
導く為に生まれて下さったイエス様を、
『このお方こそ、**神の御子、真の救い主、
メシア**であることを信じて、自分の
全存在を賭けていく日です。』

そこに信仰の真理があり、最大の喜びがありま
す。私達もこの一事に賭けて歩み抜いて行こう
ではありませんか。

お祈りをいたします。
愛と憐れみに富み給う天の父なる神様

あなた様は、滅びる他なかった罪深い私達を
救うために、御子イエス・キリストをクリスマスの夜、
誕生させて下さったことを、感謝致します。

イエス様こそ私達の全存在を救って下さる真
の救い主、メシアです。

このお方を信じ、私達の全存在を賭けて従っ
て参ります。どうぞ命の道を最後まで歩み通さ
せて下さい。

私達の救い主、イエス・キリストの
お名前によってお祈りを致します。

アーメン。